

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

COCONUTS CLUB

MARCH
2018

3

弘法さんの春、納経帳を手に



今、知多四国霊場の札所寺院を参拝すると、本堂や弘法堂の前に柱のようなものが立っていることに気が付くだろう。その柱の大きさは寺院によつてまちまちだが、四面に墨書きの字が書かれ、柱の上のほうに結わえられた「善の綱」が堂内へと延びて弘法大師像につながっている、という点は共通している。

この柱は「回向柱」や「記念宝塔」と呼ばれ、本堂の落慶や住職の晋山式（就任式）など記念事などがあるときに建てられるもの。これが、知多四国霊場の札所寺院にこぞって建てられているのは、今年が霊場開創二百十年の記念の年だからである。

本誌ではこれまでたびたび知多四国について紹介してきたが、この機会に今一度「知多四国霊場とは何か」をおさらいしておきたい。

知多四国霊場は、知多半島の九十八か寺で構成される弘法大師の霊場である。第一番から第八十八番までの八十八か寺および、番外札所七か寺、開創者にゆかりのある開山所三か寺から構成されており、すべてを巡拝すれば知多半島が一周できるよう寺院が配されている。第一番の曹源寺は

知多四国霊場 開創二百十年！

「弘法さん」の姿をあちこちで目にするシーズンがやって来た。本誌でもたびたび取り上げる知多四国霊場の話題、今回は納経帳と宝印にクローズアップしてみよう。今年が開創二百十年、未経験の人は巡拝の絶好の機会だ。

弘法さんの春、 納経帳を手に

豊明市、第八十七番の長寿寺は名古屋市緑区にあるが、この地域も古くは知多郡に含まれていた。北の端から南の端、さらに篠島、日間賀島まで知多全域にほぼ満遍なく寺院があることが特徴のひとつだ。

モデルになっているのは、言うまでもなく四国八十八ヶ所、いわゆる四国遍路である。四国は讃岐（現香川県）に生まれ、平安時代初期に真言宗を開いた高僧、弘法大師空海にゆかりのある四国の八十八寺院による霊場で、成立した時期は定かではないが、江戸時代に入って庶民の巡拝者が増え、霊場の存在が広く知られるようになった。

知多四国霊場は、江戸時代後期の文化六年（二八〇九）に知多郡古見（現知多市）の妙楽寺住職亮山阿闍梨が、知多半島に弘法大師霊場を開こうと発願したのが始まり。きっかけは、亮山の夢に弘法大師が現れ、次のような言葉をかけたことだ。「知多郡は我が悲願宿縁の地にして今や開発すべき時運が来た。汝に與ふるに之を以てせん、汝よろしく分布して衆生結願の門を開け。別に道僧二人つかわすべし（※1）」。

これは「自分（弘法大師）にとって縁の深い知多郡に、あなたが寺院を選定して霊場を開きなさい。そのため

納経帳と宝印はなんのため？

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

開創二百年の今年は、知多四国霊場の巡拝者にはちょっとした楽しみが用意されている。それは納経帳に、通常の宝印（いわゆる御朱印）と

ことは功徳を積むことであり、これを仏に奉納することによって現世安穩・祈願成就・追善供養などの願いが仏に伝わる、という考えが古くからあった。特にこれを行ったのが、日本の六十六か国に各一か寺ずつ置かれた国分寺をすべて回る巡拝者「六十部」と言われている。

しかし、全国を巡る長い旅に、写経を持ち歩くのはいかにも大変である。そこでいつしか「仏の前で経を読むことは写経を納めたことと同じ」と考えられるようになった。その証としていただいたのが宝印である。当初の宝印は、巡拝者が紙を綴じて帳面を拵え、それに住職が寺号や本尊名を墨書した上に押していた。この帳面が納経帳だ。これが広まったのは江戸時代。庶民の間で旅行を兼ねた社寺参詣が大流行し、四国八十八ヶ所や西国三十三観音などの霊場を巡拝する者が急増したのがきっかけという。納経帳は自身が巡礼者であることを示す証明にもなった。知多四国でも、開創当初から納経帳を携えての巡拝が行われていた。開創者の亮山阿闍梨は天保五年（一八三四）に全札所寺院を巡ったが、そのとき使った納経帳が今も妙楽寺に残されており、本誌2016年3月号でも紹介した。

ことは功徳を積むことであり、これを仏に奉納することによって現世安穩・祈願成就・追善供養などの願いが仏に伝わる、という考えが古くからあった。特にこれを行ったのが、日本の六十六か国に各一か寺ずつ置かれた国分寺をすべて回る巡拝者「六十部」と言われている。

しかし、全国を巡る長い旅に、写経を持ち歩くのはいかにも大変である。そこでいつしか「仏の前で経を読むことは写経を納めたことと同じ」と考えられるようになった。その証としていただいたのが宝印である。当初の宝印は、巡拝者が紙を綴じて帳面を拵え、それに住職が寺号や本尊名を墨書した上に押していた。この帳面が納経帳だ。これが広まったのは江戸時代。庶民の間で旅行を兼ねた社寺参詣が大流行し、四国八十八ヶ所や西国三十三観音などの霊場を巡拝する者が急増したのがきっかけという。納経帳は自身が巡礼者であることを示す証明にもなった。知多四国でも、開創当初から納経帳を携えての巡拝が行われていた。開創者の亮山阿闍梨は天保五年（一八三四）に全札所寺院を巡ったが、そのとき使った納経帳が今も妙楽寺に残されており、本誌2016年3月号でも紹介した。

ことは功徳を積むことであり、これを仏に奉納することによって現世安穩・祈願成就・追善供養などの願いが仏に伝わる、という考えが古くからあった。特にこれを行ったのが、日本の六十六か国に各一か寺ずつ置かれた国分寺をすべて回る巡拝者「六十部」と言われている。

しかし、全国を巡る長い旅に、写経を持ち歩くのはいかにも大変である。そこでいつしか「仏の前で経を読むことは写経を納めたことと同じ」と考えられるようになった。その証としていただいたのが宝印である。当初の宝印は、巡拝者が紙を綴じて帳面を拵え、それに住職が寺号や本尊名を墨書した上に押していた。この帳面が納経帳だ。これが広まったのは江戸時代。庶民の間で旅行を兼ねた社寺参詣が大流行し、四国八十八ヶ所や西国三十三観音などの霊場を巡拝する者が急増したのがきっかけという。納経帳は自身が巡礼者であることを示す証明にもなった。知多四国でも、開創当初から納経帳を携えての巡拝が行われていた。開創者の亮山阿闍梨は天保五年（一八三四）に全札所寺院を巡ったが、そのとき使った納経帳が今も妙楽寺に残されており、本誌2016年3月号でも紹介した。

ことは功徳を積むことであり、これを仏に奉納することによって現世安穩・祈願成就・追善供養などの願いが仏に伝わる、という考えが古くからあった。特にこれを行ったのが、日本の六十六か国に各一か寺ずつ置かれた国分寺をすべて回る巡拝者「六十部」と言われている。

しかし、全国を巡る長い旅に、写経を持ち歩くのはいかにも大変である。そこでいつしか「仏の前で経を読むことは写経を納めたことと同じ」と考えられるようになった。その証としていただいたのが宝印である。当初の宝印は、巡拝者が紙を綴じて帳面を拵え、それに住職が寺号や本尊名を墨書した上に押していた。この帳面が納経帳だ。これが広まったのは江戸時代。庶民の間で旅行を兼ねた社寺参詣が大流行し、四国八十八ヶ所や西国三十三観音などの霊場を巡拝する者が急増したのがきっかけという。納経帳は自身が巡礼者であることを示す証明にもなった。知多四国でも、開創当初から納経帳を携えての巡拝が行われていた。開創者の亮山阿闍梨は天保五年（一八三四）に全札所寺院を巡ったが、そのとき使った納経帳が今も妙楽寺に残されており、本誌2016年3月号でも紹介した。

ことは功徳を積むことであり、これを仏に奉納することによって現世安穩・祈願成就・追善供養などの願いが仏に伝わる、という考えが古くからあった。特にこれを行ったのが、日本の六十六か国に各一か寺ずつ置かれた国分寺をすべて回る巡拝者「六十部」と言われている。

しかし、全国を巡る長い旅に、写経を持ち歩くのはいかにも大変である。そこでいつしか「仏の前で経を読むことは写経を納めたことと同じ」と考えられるようになった。その証としていただいたのが宝印である。当初の宝印は、巡拝者が紙を綴じて帳面を拵え、それに住職が寺号や本尊名を墨書した上に押していた。この帳面が納経帳だ。これが広まったのは江戸時代。庶民の間で旅行を兼ねた社寺参詣が大流行し、四国八十八ヶ所や西国三十三観音などの霊場を巡拝する者が急増したのがきっかけという。納経帳は自身が巡礼者であることを示す証明にもなった。知多四国でも、開創当初から納経帳を携えての巡拝が行われていた。開創者の亮山阿闍梨は天保五年（一八三四）に全札所寺院を巡ったが、そのとき使った納経帳が今も妙楽寺に残されており、本誌2016年3月号でも紹介した。

ことは功徳を積むことであり、これを仏に奉納することによって現世安穩・祈願成就・追善供養などの願いが仏に伝わる、という考えが古くからあった。特にこれを行ったのが、日本の六十六か国に各一か寺ずつ置かれた国分寺をすべて回る巡拝者「六十部」と言われている。

しかし、全国を巡る長い旅に、写経を持ち歩くのはいかにも大変である。そこでいつしか「仏の前で経を読むことは写経を納めたことと同じ」と考えられるようになった。その証としていただいたのが宝印である。当初の宝印は、巡拝者が紙を綴じて帳面を拵え、それに住職が寺号や本尊名を墨書した上に押していた。この帳面が納経帳だ。これが広まったのは江戸時代。庶民の間で旅行を兼ねた社寺参詣が大流行し、四国八十八ヶ所や西国三十三観音などの霊場を巡拝する者が急増したのがきっかけという。納経帳は自身が巡礼者であることを示す証明にもなった。知多四国でも、開創当初から納経帳を携えての巡拝が行われていた。開創者の亮山阿闍梨は天保五年（一八三四）に全札所寺院を巡ったが、そのとき使った納経帳が今も妙楽寺に残されており、本誌2016年3月号でも紹介した。

ことは功徳を積むことであり、これを仏に奉納することによって現世安穩・祈願成就・追善供養などの願いが仏に伝わる、という考えが古くからあった。特にこれを行ったのが、日本の六十六か国に各一か寺ずつ置かれた国分寺をすべて回る巡拝者「六十部」と言われている。

しかし、全国を巡る長い旅に、写経を持ち歩くのはいかにも大変である。そこでいつしか「仏の前で経を読むことは写経を納めたことと同じ」と考えられるようになった。その証としていただいたのが宝印である。当初の宝印は、巡拝者が紙を綴じて帳面を拵え、それに住職が寺号や本尊名を墨書した上に押していた。この帳面が納経帳だ。これが広まったのは江戸時代。庶民の間で旅行を兼ねた社寺参詣が大流行し、四国八十八ヶ所や西国三十三観音などの霊場を巡拝する者が急増したのがきっかけという。納経帳は自身が巡礼者であることを示す証明にもなった。知多四国でも、開創当初から納経帳を携えての巡拝が行われていた。開創者の亮山阿闍梨は天保五年（一八三四）に全札所寺院を巡ったが、そのとき使った納経帳が今も妙楽寺に残されており、本誌2016年3月号でも紹介した。

ことは功徳を積むことであり、これを仏に奉納することによって現世安穩・祈願成就・追善供養などの願いが仏に伝わる、という考えが古くからあった。特にこれを行ったのが、日本の六十六か国に各一か寺ずつ置かれた国分寺をすべて回る巡拝者「六十部」と言われている。

しかし、全国を巡る長い旅に、写経を持ち歩くのはいかにも大変である。そこでいつしか「仏の前で経を読むことは写経を納めたことと同じ」と考えられるようになった。その証としていただいたのが宝印である。当初の宝印は、巡拝者が紙を綴じて帳面を拵え、それに住職が寺号や本尊名を墨書した上に押していた。この帳面が納経帳だ。これが広まったのは江戸時代。庶民の間で旅行を兼ねた社寺参詣が大流行し、四国八十八ヶ所や西国三十三観音などの霊場を巡拝する者が急増したのがきっかけという。納経帳は自身が巡礼者であることを示す証明にもなった。知多四国でも、開創当初から納経帳を携えての巡拝が行われていた。開創者の亮山阿闍梨は天保五年（一八三四）に全札所寺院を巡ったが、そのとき使った納経帳が今も妙楽寺に残されており、本誌2016年3月号でも紹介した。

ことは功徳を積むことであり、これを仏に奉納することによって現世安穩・祈願成就・追善供養などの願いが仏に伝わる、という考えが古くからあった。特にこれを行ったのが、日本の六十六か国に各一か寺ずつ置かれた国分寺をすべて回る巡拝者「六十部」と言われている。

しかし、全国を巡る長い旅に、写経を持ち歩くのはいかにも大変である。そこでいつしか「仏の前で経を読むことは写経を納めたことと同じ」と考えられるようになった。その証としていただいたのが宝印である。当初の宝印は、巡拝者が紙を綴じて帳面を拵え、それに住職が寺号や本尊名を墨書した上に押していた。この帳面が納経帳だ。これが広まったのは江戸時代。庶民の間で旅行を兼ねた社寺参詣が大流行し、四国八十八ヶ所や西国三十三観音などの霊場を巡拝する者が急増したのがきっかけという。納経帳は自身が巡礼者であることを示す証明にもなった。知多四国でも、開創当初から納経帳を携えての巡拝が行われていた。開創者の亮山阿闍梨は天保五年（一八三四）に全札所寺院を巡ったが、そのとき使った納経帳が今も妙楽寺に残されており、本誌2016年3月号でも紹介した。

ことは功徳を積むことであり、これを仏に奉納することによって現世安穩・祈願成就・追善供養などの願いが仏に伝わる、という考えが古くからあった。特にこれを行ったのが、日本の六十六か国に各一か寺ずつ置かれた国分寺をすべて回る巡拝者「六十部」と言われている。

しかし、全国を巡る長い旅に、写経を持ち歩くのはいかにも大変である。そこでいつしか「仏の前で経を読むことは写経を納めたことと同じ」と考えられるようになった。その証としていただいたのが宝印である。当初の宝印は、巡拝者が紙を綴じて帳面を拵え、それに住職が寺号や本尊名を墨書した上に押していた。この帳面が納経帳だ。これが広まったのは江戸時代。庶民の間で旅行を兼ねた社寺参詣が大流行し、四国八十八ヶ所や西国三十三観音などの霊場を巡拝する者が急増したのがきっかけという。納経帳は自身が巡礼者であることを示す証明にもなった。知多四国でも、開創当初から納経帳を携えての巡拝が行われていた。開創者の亮山阿闍梨は天保五年（一八三四）に全札所寺院を巡ったが、そのとき使った納経帳が今も妙楽寺に残されており、本誌2016年3月号でも紹介した。

ことは功徳を積むことであり、これを仏に奉納することによって現世安穩・祈願成就・追善供養などの願いが仏に伝わる、という考えが古くからあった。特にこれを行ったのが、日本の六十六か国に各一か寺ずつ置かれた国分寺をすべて回る巡拝者「六十部」と言われている。

しかし、全国を巡る長い旅に、写経を持ち歩くのはいかにも大変である。そこでいつしか「仏の前で経を読むことは写経を納めたことと同じ」と考えられるようになった。その証としていただいたのが宝印である。当初の宝印は、巡拝者が紙を綴じて帳面を拵え、それに住職が寺号や本尊名を墨書した上に押していた。この帳面が納経帳だ。これが広まったのは江戸時代。庶民の間で旅行を兼ねた社寺参詣が大流行し、四国八十八ヶ所や西国三十三観音などの霊場を巡拝する者が急増したのがきっかけという。納経帳は自身が巡礼者であることを示す証明にもなった。知多四国でも、開創当初から納経帳を携えての巡拝が行われていた。開創者の亮山阿闍梨は天保五年（一八三四）に全札所寺院を巡ったが、そのとき使った納経帳が今も妙楽寺に残されており、本誌2016年3月号でも紹介した。

※1 知多新四国連合会（知多四国霊場会の前身）が昭和25年に発行した「愛知県知多新四国開創縁起の概要」より抜粋。
 ※2 番外札所と開山所はのちに加わった。



納経帳の見方

その寺院の本尊

弘法大師。1～88番は椅子の上に座し、右手に金剛杵（真言密教の法具。五鉤杵ともいう）、左手に数珠を持つ姿が基本形。開山所はゆかりの行者が描かれている

記念宝印

宝印（三宝印）。「弘法僧宝」が隷書、篆書、梵字などで刻まれている

所在地。古い地名が記されている寺院もある

寺号印

札所番号印。番外札所の場合は「月山篠島霊場」（西方寺・南知多町）「龍亀霊場」（浄土寺・南知多町）などのように愛称の印も用いる

その寺院の御詠歌。寺の由緒、風光、弘法大師の遺徳、信者の心得、詠み人の心情などを五七五七七に詠んだもので、寺ごとに異なる。いつ成立したかは不明だが、開創初期には存在していたと考えられている。ここでは「野間の月 見れば心のます鏡 おのが浄土は いかでくもらん」

その寺院の本尊名。この場合は阿弥陀如来

さまざまな記念宝印



弘法大師降誕千五百十年（大正13年）



弘法大師御入定千百年（昭和9年）



新四国開創百三十年（昭和13年）



皇紀二千六百年（昭和15年）



高野山開創千五百十年（昭和40年）



弘法大師御生誕千二百年（昭和48年）
弘法大師千五百十年御遠忌（昭和59年）



知多四国開創二百年（平成20年）



弘法大師知多御巡錫千二百年（平成26年）



宝印には魔除けの力があると考えられており、自分が死んだとき、棺の中に納経帳を納めると極楽往生できると言われている。また、押すのは一回きりではなく、参拝する度に重ねて押してもらうのが通例。印を重ねるほどに御利益があるとされ、何度も巡拝する人の納経帳は全ページが真っ赤である。

メモリアルイヤー限定 記念宝印のこと

今でこそ一年を通じて多くの巡拝者でにぎわう知多四国霊場だが、開創当初から多かったわけではなく、巡拝者が増えるのは、開創から八十年ほど過ぎてから。明治二十六年（一八九三）、それまで「尾州知多郡八十八ヶ所」や「准（準）四国」などと呼ばれていた名称が「知多新四国霊場」に統一された頃だ。今ではこの呼び方はしないが、「新四国」と刻まれた標柱を寺院で見たことのある人は多いだろう（※3）。現在のように印刷・製本された納経帳が初めて登場したのもこの年である。

こうした外枠の整備に呼応するかのようには巡拝者が増えてゆく中、明治時代後半には相次いで勃発した日清戦争・日露戦争の戦勝祈願のため

には知多四国が開創百十年を迎え、この時、二回目の記念宝印を制作。以後、切のいい十年ごとに作られるようになったほか、弘法大師御入定千百年（昭和九年）、弘法大師知多御巡錫千五十年（昭和三十八年）、高野山開創千五十年（昭和四十年）、弘法大師御生誕千二百年（昭和四十八年）、など、弘法大師に関連する記念の年にも作られてきた。弘法大師と無関係なところでは、昭和十五年の皇紀二千六百年記念や昭和二十七年のサンフランシスコ講和条約記念の宝印もあった。

五ヶ所の各霊場で、美浜町と南知多町の寺院だけで構成される南知多三十三観音のほかは、すべて知多半島の広い範囲に札所寺院が散らばっている霊場だ。

知多四国霊場の巡拝者にとって不思議なのは、「直伝弘法」ではないだろうか。弘法大師の霊場は同じ日本中にあるが、同じ地域に二つの弘法大師霊場が重なって、現存する例は、おそらく知多半島ぐらいのものだろう。歴史も古く、今年で開創九十三年である。

最近の記念宝印では、平成二十年の開創二百年、平成二十六年の弘法大師知多御巡錫千二百年が記憶に新しい。今回の記念宝印は四年ぶりになる。

もうひとつの霊場 「直伝弘法」のこと

ここまで知多四国霊場の納経帳について紹介してきたが、実は知多半島で見られる納経帳はこれだけではない。現在も入手できるものが、知多四国を含めてなんと六種類もあるのだ。直伝弘法八十八ヶ所、御母公御分身二十一ヶ所、南知多三十三観音、知多西国三十三ヶ所、法然上人二十

誰の発案により開創されたのかは不明だが、直伝弘法という名称は、当時、四国八十八ヶ所霊場会の会長であった佐伯宥榮より「弘法大師御尊

体を直伝された」、つまりお墨付きを与えられたことによる。佐伯宥榮は弘法大師の生家の子孫であり、弘法大師生誕地に開かれた誕生院善通寺の貫首（寺の最高位の僧）という高僧である。札所には、知多四国霊場と重複しない寺院が定められ（※4）、各寺には「四国直伝証」を授与した。また、札所寺院に納める弘法大師像の製作資金は、坂井村（現常滑市）出身の資産家、片岡辰次郎が寄進した。

辰次郎は明治五年（一八七二）年に坂井で生まれ、東京に出て株取引で莫大な財を成した人物。単に株で儲けただけの人ではなく、業界の指導者として株取引の健全化を推進し、また新田開発などにも取り組むなど地域貢献活動を積極的に行っていた。坂井の東光寺（第六十番）の檀家という縁もあり、弘法像の寄進が功德になると考えたのだろう。このため、直伝の弘法大師像の前には片岡家の位牌が添えられている。

この霊場の特徴のひとつは、河和、坂井、小鈴谷、広目、西之口といった知多四国霊場の札所が存在しない地域や、天沢院、東龍寺、齊年寺（常滑市）、乾坤院、（東浦町）、長源寺（東海市）といった知多郡を代表する寺院も加わったことだ。また、名鉄の前身



に寺を巡拝する者が急増。また、開創百年を迎えた明治四十一年（一九〇八）には各所でさまざまな行事が開催され、これがますます巡拝者を引き寄せる。そのうえ、この頃から内海の内田佐七が経営する知多自動車などによって観光開発と宣伝が大々的に行われたことで、観光と参拝を兼ねて知多半島を訪れる人も鰻のぼりに。こうして知多半島は、明治時代後半から大正時代にかけて「信仰と観光の地」のイメージが確立していった。開創百年の翌年には、増える一方の巡拝者に対応するため「新四国札所連合寺院会」という統括組織が発足。これが現在の「知多四国霊場会」のルーツである。

それから数年を経た大正三年（一九一四）、四国八十八ヶ所が開創千百年を謳って記念行事を開催した。先に四国遍路の成立年は不詳であると言いたが、統括する四国八十八ヶ所霊場会は、四国遍路は空海自身が寺院を選定して開創したとしている。このとき知多四国でも「分土霊場」として協賛供養を執り行い、弘法大師誕生会（弘法大師の誕生日）六月十五日を祝う法会の記念宝印を授与した。これが知多四国で最初の記念宝印だ。

その四年後の大正七年（一九一八）

※4 知多四国霊場と重複する影現寺（美浜町・番外）と曹源寺（常滑市・番外）は、直伝弘法の開創当時は知多四国の札所に加わっていなかった。また、影向寺（南知多町・第40番）と良参寺（美浜町・第48番）は、近隣にあった直伝弘法の札所が廃寺となったために引き受けた。

写真 1. 知多四国霊場の弘法大師像 2. 弘法大師の母・玉依御膳（たまよりごぜん）の御母弘法 3. 片岡辰次郎が寄進した直伝弘法像と片岡家の位牌

※3 名称が「知多新四国」から現在の「知多四国」に変更されたのは1983（昭和58）年。



である愛知電鉄が積極的に後援していたようで、鉄道利用者を考慮してか、知多郡には含まれない鳴海駅の近くに第一番から第三番札所を、太田川駅の近くに第八十八番札所を置いている。開眼供養が行われたのは知多半島ではなく、日本唯一の超宗派寺院として有名な覚王山日泰寺（名古屋市中種区）で、世間の耳目を集めたことだろう。なにかと戦略的ではある。

しかし、知多四国霊場に対抗するような霊場があとから開創されたからと言って、目くじらを立てるようなことでは全くない。もともと知多四

国の巡拝者は、弘法道の途上にある札所でない寺院にも参拝したり、弘法大師にゆかりのある場所にも立ち寄るなど、かなり自由なルートで巡拝していたという。新たに直伝弘法の札所になった寺院でも、以前から多くの巡拝者が訪れていたはずで、おそらく知多四国霊場の寺院も、鷹揚に新しい霊場を迎え入れたのではないだろう。二つの大きな霊場が並存することで弘法大師の信仰が広まり、功德を積んでより多くの人が救われるのであれば何よりではないかと。

しかし直伝弘法は太平洋戦争を機に巡拝者が減り、戦後はほとんど

忘れ去られてしまった。そのあたりは、歴史の古い知多四国霊場との組織力の差であろう。長らく途絶えていたが、昭和五十年代に豊田自動車機大府工場の社員サークルが会社近くの浄通院（第九番）と交流する中で直伝弘法の存在を知り、毎年春に手製の納経帳を携えて巡拝するようになる。これをきっかけに、美浜町の安養寺（第三十五番）が中心となって再興を企図。廃寺もあつたため札所寺院を再制定し、平成十五年（二〇〇二）に霊場会を立ち上げて納経帳を制作したのだった。

ちなみに知多半島にはもうひとつ、同規模の「本四国写し八十八ヶ所霊場」というのもあり、三つの弘法大師霊場が共存する時期もあったというから凄い。しかしこちらは、いつ、誰が開創し、いつ廃れたのかまったく不明。いくつかの寺院に弘法大師像が安置されているだけで、今では巡拝する人はいない。

それはさておき、いくつもの霊場が今なお息づいている知多半島は、なんと大らかで豊かな土地であることか。この春、ぜひ納経帳を手に寺を巡ってみてほしい。御利益もさることながら、住み慣れたこの土地にも、自分の内面にも、何か新しい発見があるはずだ。

納経帳がある知多半島の霊場

知多四国霊場

文化9年（1809）、亮山阿闍梨の発願により開創。かつては結願後、高野山に見立てた八事山興正寺（名古屋市中昭和区）か弘法山遍照院（知立市）へ御札参りするのが習わしだった。開創210年の今年は記念納経帳を用意している。

第1番曹源寺（豊明市）から第88番円通寺（大府市）まで知多半島全域に98寺（開山所3寺、番外7寺）



知多四国霊場会事務局 0569-87-0288（第53番安養院）
www.chita88.jp

四国直傳弘法八十八ヶ所

大正14年（1925）開創。香川県の誕生院普通寺貫主・佐伯有榮より弘法大師御尊体を「直伝」された。開創当初の納経帳には、88寺のほかには覚王山日泰寺（名古屋市中種区）と「知立三弘法」も記されており、それらも併せて参拝したようだ。

第1番瑞泉寺（名古屋市中緑区）から第88番龍雲院（東海市）まで知多半島全域に88寺



四国直傳弘法大師尾張八十八ヶ所霊場会サポートセンター
0569-21-2545
jikiden-koubou.jp

高野山弘法大師御母公御分身知多奉安二十一霊場

弘法大師空海の母、玉依御前を祀る霊場で、別名「はこうぼう」。開創年は定かでないが、大正時代にはすでに存在していたようである。納経帳は個人の寄進により平成5年に制作されたが、現在は発行されておらず在庫もわずか。

第1番曹源寺（豊明市）から第21番長源寺（東海市）まで知多半島全域に22寺（番外1寺）



※統括組織は存在しない

知多西国三十三所霊場

明和7年（1770）、岩屋寺中之坊第十六世智善上人が、観音菩薩の夢告により開創した観音菩薩の霊場。知多四国霊場の札所とは29寺が重複しており、亮山阿闍梨はこれを参考にしたとも考えられている。平成22年に再興され、納経帳が制作された。

第1番岩屋寺から第33番観音寺（阿久比町）まで知多半島全域に33寺



御嶽山洞雲寺 0569-35-2705
www.chita33.com

南知多三十三観音霊場

昭和4年（1929）、観音菩薩信者の要請を受け、関西地方の西国三十三観音寺院より御分身と靈土を奉安して開創。古くから秋に巡拝するのが定番で、毎年10月に参拝すると「散華」がいただける。知多四国霊場の札所とは16寺が重複。

第1番影現寺（美浜町）から第33番持宝院（南知多町）まで美浜町・南知多町に35寺（番外2寺）



南知多三十三観音霊場会サポートセンター 0569-21-2545
www.minami-chita33.jp

法然上人知多二十五霊場

法然上人は浄土宗の開祖。関西・岡山・香川の法然上人ゆかりの寺院で構成される江戸中期開創の「法然上人二十五霊場」を手本に、八百回忌にあたる平成23年に開創された。納経帳ではなく「念佛帳」と呼び、各ページに「南無阿弥陀仏」の念仏が書かれている。

第1番常楽寺（半田市）から第25番攝取院（半田市）まで知多半島全域に25寺



御嶽山洞雲寺 0569-35-2705
www.chita25.com